

【第6回松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会 発言録】

(敬称略)

開催日時 平成30年8月8日(水) 午前9時30分から午前11時50分まで

場 所 松本市立博物館2階講堂

出席者 松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会

菊池健策委員、後藤芳孝専門員、関悟志専門員、原明芳専門員
乃村工藝社(設計JV)

藤沢氏

事務局(松本市立博物館)

木下館長、中原課長、船坂課長補佐、三木主査、堀井主任、千賀主任、
岡野囑託

1 部会長あいさつ

菊池:おはようございます。お暑い中お集まりいただきありがとうございます。
松本市基幹博物館基本設計案に対するパブリックコメント中です。その
パブリックコメントに向けて、更に基本設計の内容を詰めていくことにな
るだろうと思います。

それに向けて本日は「全体プランについて」と「常設展示の空間構成
と展示内容の検討状況について」という議題が用意されております。いま
パブリックコメントをしている間ではありますが、少し立ち止まって
もう一度これまで詰めてきた案を再検討することもいまなら可能なの
かなと思っております。

それを踏まえて、次のパブリックコメントに向けた修正案があればそ
の修正案作りにも活かしていきたいという風に思いますので、ぜひ忌憚
のないご意見をいただきますようお願いいたします。

2 議題(1)全体プランについて

事務局:(説明)

菊池:それでは、説明についてのご質問をいただく前に確認だけ。「諸室面積
変遷経過表」A・B・CあってCだけ7月27日現在でわかりますが
Bはパブリックコメントで提示したんですか?

事務局:はい、そうです。

菊池:Aが当初案ですね。

事務局:はい。

菊池:わかりました。それでは、ご質問ありましたらお願いいたします。

ちょっと繋ぎで、ご説明を聞いて気になっていましたが、パブリッ
クコメントに提示した案を既に修正検討しているんですが、これはパブ

リックコメントの趣旨として大丈夫でしょうか。要するに、パブリックコメントをいただくために提示した案があって、それとは違う案が直後に動いているのは後々問題にはならず済む範囲でしょうか。

事務局：はい。まず、説明資料の関係で記載させていただいたんですが7月20日この基本設計案について議会の方にお諮りした段階で面積規模について8,000㎡の上限を超えているという中で見直しを行っていくということについては議会の方にご報告をしております、並行して動かさせていただいている状況でございます。

原：これでパブリックコメントをもらっているんですね。これで意見をもらっているから、これと違うのが出たところで問題は起きないのかという質問だと思うんだけど、そういうところで違っている場合どういう対応をされるのかと。

中原：パブリックコメントがB案で出ているわけですがけれども、どのような意見が出てくるのかという中で、いずれにしても最終案ではないのでその中で、面積も減らしていくということで、後で公表させていただくという形になるのかなと思っているんですが。

菊池：つまり、パブリックコメントを求める案が出た直後にもう修正案が出ているわけですね。なので、「これが何のためのパブリックコメントなのか」と言われたら大変かと思ったものですから。

中原：修正をかけているのは内部資料でありますので、今日はここでお示しさせていただいておりますが、あくまでも内部資料ということで検討している内容でございます。

菊池：原委員、よろしいでしょうか。

原：パブリックコメントでついた意見も反映させていくわけですね。

中原：そうです。

原：元が違くと立ち位置が違って大変だなと思うところが出てくるんじゃないのかと思うんです。そこのところが上手くできるのかなと。

木下：松本市はパブリックコメントは単独でやらないで、並行して議会の意見とかというのを全部そこで一緒に調整していくような形を他の案件もとっています。今回も8,000㎡を超えている条件で見直しを必ずしなければいけないという条件になっており、そのことについてはパブリックコメントを終えてから全部整えて調整すればいいような気がするんですが、私どもの設計の期間がタイトなものですから、それを先行して進めているということでここでご提示しています。内部作業ということでご理解をいただければ。

菊池：要は、これは事務的な作業としてはパブリックコメント終了後の日付で出るべき案なんですね。

中原：はい。

菊池：原委員が心配されていらしたように、パブリックコメントが求めている案と修正案が別にあるとなると、求めた意見の立脚点が違っちゃうと考え方が変わるのではないかと。それも有り得るんじゃないかという心配だと思っんですが。

原：うまく説明がつかないと思っんですが8月28日以降のあれですよ。

菊池：最終的にはパブリックコメントの案、そして他の修正意見等を踏まえてこういう修正案になったという形にならないと、「やっただけで全然意見を反映していないじゃないか」と言われたらそのとおりになっちゃう危険性があります。

もう1つですが、実は「全体プランについて」の3の(2)に「トラックヤード・一時保管庫の縮小」というのがありますが、概算建築費の問題、それから建築費用を積算する根拠となった建物の面積があつて、予算内に収めなければいけないというのはよくわかるんですが、一番大事なのはトラックヤードにしても一時保管庫にしても博物館活動の根幹にかかわる部分です。修正案で活動に影響があるのかないのか、特に借用資料を収蔵庫の前室に入れるという案が出ていますが、寺社から資料を借用した場合に収蔵庫の前室いきなり持っていくのは危険なのではないかと。要するに、カビ・虫が本当に燻蒸されているのかどうかの確認は難しいので、一時保管庫は、たぶんそのために必要な施設ですから、できれば収蔵庫の前室いきなり持っていくのは避けた方がいいのではないのか、それが確認として少し気になったことなんです。

この専門部会が動き出したときから言われているのは、博物館の資料を全部収蔵するにはパンク状態だというお話だったので、収蔵庫を小さくして面積を調整すると大丈夫なのかという質問をさせていただきます。

事務局：まず、一時保管庫の関係ですが未燻蒸のものをとすることは確かにあるんですが、運用の中で借用時に資料の調査を進めていく中でそうしたところも確認しながら運用の中で、例えば、持ち込む段階の前に燻蒸をさせていただくとかお願いをさせていただきながら工夫していきたいと思っます。あくまでIPM上の考えですとか、収蔵庫の中に入れるという考えのところについては燻蒸したものを2階以上に入れていくという考えを徹底する。そこはぶれないよという考えで一時保管庫の関係についてはそうした整理で進めていければという風に考えています。

後半の収蔵庫の資料の関係、全体ではパンクしてしまうという中ですが、施設構想の段階でも基幹博物館の中で入れる資料については3点提示しておりまして、希少性がかなり高いもの、厳密な温度管理が不可欠なもの、更に基本構想・基本計画の段階で立てた博物館としての5つの機能の方針があるんですが、収集保管機能以外の、例えば、展示学習支援ですとか集客観光、そうした他の機能で活用が見込まれる資料につい

ては収蔵していくという一定の1つの方針を出しております。そうしたところをやりながら、基幹博物館に入れる資料については整理をつけ収蔵をかけていくという風に考えております。

そこに乗っかってこないものをどうするのかというところも、1つ担保していかなければならないのですが、例えば、分館もそうですが、合併5地区で保管しております旧校舎を活用した資料の保管もしておりますので、そうした全体計画、この基幹博物館の収蔵計画と併せて検討していきたいという風に考えております。

後 藤：私も一時保管庫の縮小はいいのかという感じがするんですけども、2枚目の図面を見るとトラックヤードが小さくなっていますね。その後ろに荷解きと前室があってその前に一時保管庫があるわけですけど、館で燻蒸するときに必要なと思うんですが、どこでするんですか？

事務局：一時保管庫を使って燻蒸を行おうと思っています。

後 藤：そうすると、例えば、寄贈などで入ってきた資料はどこに置いておくんですか？

事務局：ものは一時保管庫に入れて一定のタイミングで一斉にかけていくというイメージを持っています。

後 藤：いまの堀井さんの話の中で、借用先で燻蒸をかけて持ってくるという話がありましたけれども、それは実際は無理な話で燻蒸はこっちでやらなければダメだと思うので、その考え方はしない方がいいかと思います。これでは狭いのかなと思いますけどどうでしょうか。

原：よろしいでしょうか。借用してきたのは基本的には燻蒸を一時保管庫でして、どこに一時保管をしていくんですか。

事務局：燻蒸が済めば2階以上のエリアに上げるという考えです。

原：一時的に借りてきたものが2階の収蔵庫に入っているということですか。

事務局：そうですね、はい。2階の収蔵庫の「一般収蔵庫1」の中にその借りてきたものを入れるためのスペースを厳密に区分するイメージというか、そういう設計でいま進めております。

菊 池：燻蒸はどんな方法を想定しているんでしょうか。一時保管庫でする形になるんでしょうか。要するに燻蒸室はないんですよね。

事務局：この部屋の中にテントを張って、そこの中でガス燻蒸をするという想定をしています。

菊 池：原委員が心配されたように、対応が頻繁にできるのかどうか気になりますよね。博物館の立地が街中で家が周りにたくさんあるので、そのことも少し頭に入れておかないと。ですから、おっしゃっているのは包み込み燻蒸ですけど、それで対応がやり切れるかどうか。ガスの抜き方、吸着しないといけないでしょうから、そういったことも条件の1つに入るのではないかと思います。

事務局：いまおっしゃっていただいた部分については、久米設計の方も承知をしておりまして、管を通して、例えば、トラックヤードのところで集中的に排気を集めるという管路も設定を検討してもらっています。

菊池：家が建て込んでいる地域なので、経験から言うと一時保管庫に入れてその部屋で燻蒸すると一時保管庫自体に入ったカビや虫はすべて燻蒸できるわけではないです。包み込んだ中しか燻蒸できないので部屋全体はカビや虫が残っている可能性がある。一度失敗したことがあって、一時保管庫に戻ってきた資料を入れておいたら、大量に虫が孵化してくれまして慌てて燻蒸したんですが、しばし一時保管庫が使いえなくなってしまった。要するに、他の資料を入れておくことができなくなってしまったということもあるので、なるべく短いスパンで燻蒸できる手立てを考えておかないと一度虫やカビが出てしまうと燻蒸できるまでの間に使いえなくなってしまいう可能性もあります。

ほかにご質問ありましたら。

関：確認なんですけれども、当初AB2種類の部屋があるというのが、縮小するということなんですけれども、前回でもご意見が出された中、ものによって資料の保存環境が違うのでそれに対応するもので、ABという話になっていたと思います。今回縮小するにあたって、そうすると一時保管庫の中で密閉できるような容器の中で燻蒸して、同じ空間の中で別の保存環境を確保するという。一室にしても燻蒸をどこでするかもありますが。

前室に入れるときも資料ごとに違った環境に整えてあげる、そんな運用上の工夫で対処されるということでしょうか。

事務局：いまご指摘いただいたとおり、今回の修正で想定している一時保管庫は木で囲むような仕様にはなっていません。ですので、寄贈される資料はさまざまな材質があるかと思いますが、部屋の中で什器的なもので環境を整えてあげるといったことは必要だと思いますので、運用上のやり方でその辺は対応していきたいと考えています。

原：一時保管庫って燻蒸室になっちゃいますよね。これを見ると収蔵庫は2階にしかないですけど、何でも置ける収蔵庫がどこかに欲しくなっちゃうんじゃないかなと。要するに、2階3階には上げられないから。お金もかかるので溜めておいて燻蒸するしかないですから。そうすると一時的なものほどどこか置く場所を考えておかないと。そういうことも頭に入れておいた方がいいかなと。何でも置ける場所がどこかにあった方がいいかなと。

後藤：このままでいけば、荷解室や前室辺りに積み込まれるような気がするね。

菊池：いまのところと言いますと、年間何回ぐらい燻蒸する予算が確保できるんでしょうか。特展を年に何回するのかも関わってくるんだらうと思う

んですけれども。

木 下：全く考えていないです。いまの話なんですけど、新しい博物館を作るところは限られた空間ということがあるものですから、全部ここで処理することは難しいと十分承知しております。先ほど堀井の方から話をしたとおり松本市の博物館全体としては収蔵庫の計画を3段階ぐらいで考えておりますので、ここではない場所の、要はあまり環境のいいところではないですけれども、そういう郊外にいま設置を検討している専用の収蔵庫の部分で燻蒸したりだとか、そんな少し余裕を持ったスペースを確保していくような方向で検討して、そちらの方で一時置き燻蒸というようなことをして、この基幹博に収蔵しなければいけない基準のものは、その後でこちらに入れるような、寄贈品とかそういうものに関しては色々なやり方が考えられるのかなと思います。

原：ここだけじゃなくて、ほかのところにも考える？

木 下：はい。そちらの方が順調に計画が転がっているかということと必ずしもそうではないという部分もありますが。

菊 池：段々欧米流の博物館収蔵庫になっていくのかもしれませんがね。本体の建物から離れたところに収蔵庫だけ作って。

木 下：基幹博物館の立地の選定というときに、そういう足かせははまっているのかなということで、そういう考え方をしていけないと経済的な面からも効率的な運用はできないのかなという風に思うので、運搬とかというところで経費はかかってくると思うんですけれども、考え方としては全体でという考え方をしていくことかなと思っています。

菊 池：その考え方は前に説明を受けているのでわかるんですけれども、問題は特別展や何かの一時借用資料を保管するのに博物館から借りてくるのは燻蒸をしているのが前提で考えるわけですけれども、そうじゃない社寺等から借用した資料を展示に使うためには燻蒸をしないとイケない。その前に一時保管庫にどのくらいの頻度で燻蒸をするのか、あるいは特別展以外のものが一時保管庫に入っていることが余りないようにできるのかということです。

木 下：本当に市内の寺社にあるような資料を集めて、それだけで展示を組んでいくような場合というのは、もともとこの施設では対応できないのかなと思っていますので、その時はいま言ったような第2の収蔵庫とかそういうものを活用していくことを当然考えていかなければ、やって順次運び込むことをしていかなければいけないんだろうと思うんですが、そうじゃなくて企画展とかの中で一部にそういうものを使うというものはできるだけここで対応してということを考えています。今回の変更、「一時保管庫が一室になった」という説明なんですけども、本当は「収蔵庫が減った」という理解なんだろうなと。収蔵庫の部分に一時保管庫のもう

1つの部分をそのところに当てはめているような考え方になっています。燻蒸をしない収蔵庫というところが機能的に一部そこにいっていますという形なものですから、そういう説明の仕方がいかどうかということだけでなく、事実上はそっちの方が近いということだと思います。

後 藤：良いか悪いかわかりませんが、内部でやるんだったらトラックヤードはたぶん燻蒸場所になってくるんでしょうね。ただ、内部の場合大きい物が入るだけのテントが建てるのかどうか、その辺も検討して。トラックヤードで燻蒸するのはまずいですから。

菊 池：密封が保障されていませんから危険度は高いです。

木 下：街の中だから厳しいのかもしれないですね。距離が取れないという。

菊 池：基幹博物館の場所で燻蒸をやるというのは非常に周りの住民からきちんと了解をとっておかないと、後に問題になる可能性があります。燻蒸がありますと説明しておいて安全性を説明する必要がありますね。

いずれにしても、一時保管庫に入れた資料についても燻蒸しない限り収蔵庫に持っていけないということですから、博物館の職員がやるというわけにはいかないでしょうから予算をしっかりと確保する努力をしないと回らなくなる危険性があるでしょうね。

いまの説明に対してこの修正案でいいのかどうかというところでご意見がありましたらお願いいたします。

収蔵庫の面積が400㎡ぐらい減っているんですよ。大体この部屋と同じくらいだとすると、とてつもなく広いです。収蔵庫を削るという面積の調整が妥当なのかどうかだと思えるんですけども、他で削れる場所はないでしょうか。

中 原：展示室については、いまの面積が比較としても1.1倍位しかありません。そういうことを考えると展示室を減らしていくというのはなかなか厳しいのかなと。

木 下：展示室もロビーとのやり取りで、前計画からは減らしてきている。今度は収蔵庫をとということです。機械室やそういうところも、十分に詰めた上で、他にないというので基本機能の展示室・収蔵庫というところに検討がきたということです。収蔵庫に対しては、いい環境で保存しなければいけない資料に関しては空間が著しく狭くなっているということは事実なんですけど、収蔵物全体という考え方に立てば他の対応ができるということもあって、ここに手を付けるしかないのかなという現状です。

菊 池：いざ面積を削っていく説明を聞いておきますと、設計された方には怒られそうですが3階の吹抜け部分というのがもったいない気がします。この高さの空調をするのには、大変な電気代がかかるんじゃないかなと。

原：冷暖房が大変ですよ。1階から全部抜けているからものすごく。吹抜けの空調は調節が効かないですから。

菊 池：ほかにご意見ありましたら。

後 藤：2階のところに「図書・情報室」がありましたが、そこに人は配置されるんですか？

中 原：今後の管理の方法はこれから詰めていくところです。

後 藤：特別展示室はしょっちゅう開いているわけではないので、ここだけが人が動く場所になるので、やっぱり人を置かないとたぶん管理が大変だろうなと思うので。

菊 池：いまのご意見、特に「子ども向け展示室」なんかも含めてあったように記憶していますので、少し考慮していただければと思います。

それでは、「全体プラン」については説明をいただいて、それについてパブリックコメントを踏まえて更に修正がある部分ということを前提にこの説明を了承するというところでよろしいでしょうか

全委員：了。

2 議題(2)常設展示の空間構成と展示内容の検討状況について

事務局：(説明)

後 藤：5ページの平面図のことですけれども、左の山の部分ですが上の部分には人は入れませんか？

事務局：どこでも上は歩けるようにしています。水色の表現にしたのが、頂上に立って下界を見下ろすというか、空中写真のような表現を床面に貼ってみたら頂上に登った雰囲気味わえるかなということで、いま検討の1つとして色を変えてみています。なので、空の色と言いますか。

後 藤：緑色の線は、立ち入り禁止の仕切りではないですか。

事務局：はい。この線は先ほどの説明の中で当てはめると西山のシルエットが上にかかっている表現です。なので、かなり上の方にのれんがかかっているようなイメージです。

後 藤：この左の奥の壁面には何もこない？布がぶら下がるような格好で山が描かれるということですね。

事務局：空間のそちら側にはぶら下がって、こちらのほうには別のというイメージです。左の上の部分に覗きのケースがありますが、この背面にグラフィックを入れるのかということを含めて検討していきます。

後 藤：一番奥の方に山を描いたらどうかという提案があったという話を聞いたんですが、それは面白い提案だと思っていたんですが、私なんかは城下町のジオラマから入ってきて、パッと向こう側を見たときに向こうに何があるんだというのが見えるというのがもっと大事だと思うので、良い案だと思ったんですが、のれんみたいに下がっているというのはどうかなという気がするもので。一番奥の壁面のところはピシッと座った方がいいんじゃないかという感じがするんだけど、どうなんでしょう。

原 : 私が思うのは、伊勢町に入りますよね。そうするとビルの真ん中からアルプスが見えますよね。あのイメージがお城のところを抜けたら城下町に入ってそこが向こうに見えると。たぶん、これは入口にぶら下げることによって、後ろわからなくして中に入ったら、ということ考えた。上にぶら下げることによって迫力が出るかどうか。お城を出たときに「おっ！」と言えるようなものができればいいと思うんだけど、その部分がいいのか、奥の部分がいいのか。前の部分の工夫によってアルプスがパッと見えるのがいいかと。それで、逆に入ったら奥の方は上高地みたいな雰囲気があるといいと思うんだけど。

菊 池 : 奥の壁面に描いてしまうと交換できないですか？

原 : できません。

菊 池 : 西山と糸魚川に抜けていくルートも出てきますので。

原 : 光によって朝と夜が出てくると面白いかな。時間に応じて見た目が変わると面白いと思います。

後 藤 : 時間で変わるっていうのは面白いですね。ただ、これを上から下げた場合材質にもよると思うんだけど空気で動いたりしないですか？

原 : そこを工夫できないかなと。奥に造り付けになっちゃうと何年かするとあれだと思えますよ。

菊 池 : 西山は高山と行き来する歩荷ですよ。それと同じ歩荷でも、いわゆる糸魚川から来る歩荷がいますよね。これによって気を付けなければいけないのは、みんな同じになっちゃうと、どっちがどっちだか分からなくなってしまうので、よく確認をして復元していただきたいということと、年末になるとみんな同じで鰯を運ぶけど、糸魚川の歩荷たちの荷物は塩だったみたいですから、その辺を少し確認して間違いがないようにして欲しいと思います。

それから、ジオラマですが面白いと思うんですけども気を付けないと「ジオラマはジオラマ」という言葉があって、そこをどういう風に表現していくのかということと、もう1つはジオラマで描く範囲をどこまでにするかを、少し検討する必要があるのではないかと考えておりました。例えば、犬山城下町ジオラマですと、小さな街ですから梅まつりの範囲と城下町の範囲が重なるので問題ないんですが、松本の場合は松本城下町からどの範囲辺りまでをジオラマで再現するのかによってだいぶイメージが変わるんじゃないか、その辺を少し詰めていく必要があるような気がしております。

ついでにもう1つ。展示室の天井というのはむき出しですか。

事務局 : むき出しです。

菊 池 : 空調とか大丈夫ですか？

事務局 : いま文化庁の方ともその辺りを検討していった空調の要件で指示が出て

います。

菊池：夏に冷やし過ぎて水滴が落ちてくると大変ですし、冬も寒気の影響を受けて温度が下がるということがあるので、天井のない屋根だと大変だと思うんですが、天井の一番高いところで6 m、低いところで4 mだとすると、これだけの天井高を活かす展示というのはどういう展示になるのか、どういうイメージになるのか。展示資料の中で大きなもの、例えば、九博を作るときには、最初から担当の学芸員の人たちから7 mの高さの掛軸を全部広げた状態で展示したいので、天井もそれだけの高さを確保したいと言われていたのでやったんですが、正直言うと7 mの高さだと上の方は見えません。だから、そこを考えて高さが6 m・4 m、4 mだったら何とかかなと思います。6 mの高さのものとなると余程の工夫をしないと見えにくくて何があったのか分からないことが出てくるかと思います。天井高に規制された展示ではなくて、展示に必要な天井高でいいんだと思うので、その辺が少しどうなのかこれから先、展示のシナリオを作っていくときに併せて考えていただければと思います。

原：山の高さを活かすというのが山のところで一番使えるところだと思うので、三角屋根のところをどうやって使えるかじゃないですかね。そのところで山の迫力が出てくると思うので。

それともう1つ心配なのは、入ったときの驚きというのは何があるのか、そのところは結構検討した方がいいかなと思います。入って何だと思われては。やっぱり上高地とかあるんですから、そういうところの迫力が作れば良いと思います。

後藤：いまの山の関係で8ページにイメージがあるんですけども、全体に部屋の照度が暗いですよね。暗い部屋が向こうまで50 m続いていると考えなければいけないと思うんですけども、その場合にこの黒いやつがあっても何のインパクトにもならないという部分もあるので、部屋全体の照度とどういう彩度で山を描くかということは検討しないといけないんじゃないかと思うんですね。このままでいったら、暗い部屋に真っ黒いものがぶら下がっているという感じになるのではないかと心配です。部屋全体は天井から光を採らないライティングなわけですよね。そうすると倉庫みたいな暗いものがドーンと繋がっているというイメージになっちゃうようで気になりました。

それから、パブリックコメントの方の10ページのところに空間のイメージがあるんですが、入ったところはある程度閉鎖された空間で天井は抜けているけれど、ある程度閉鎖された空間になる。そしてジオラマが初めて目についてそこでやっと向こう側が見える。要するに、ジオラマのところを区切っておく必要があるのか、もっと向こう側が見えてもいいんじゃないかと思うんですがどうでしょうか。

事務局：この空間イメージは担当の中では、城下町の方はあえて暗い空間にして閉められた空間を想定しています。その中で城下町、江戸時代の世界にしっかりと浸かっていただいて、ここから出ると一気に開けた空間にとという形で、空間のメリハリを付けるという意味でも、あえて城下町の方からは広く見通せないようなイメージをしています。

一方、左側の方は衝立などが透けたというか骨組みだけの素材になっているのは、各ブースがそんなに大きい空間ではないですから、ここはあえてそんなに区切らずにこの衝立から向こうまで見通せるような広い空間というようなイメージで作っています。先ほどもありました山の空間もこれと同じように最後まで見えてしまうと、山って本来奥にあるもので、それはどうかというような考えもありまして、上にカーテンをひいたりだとか、入口に歩荷のような衝立を付けて、わざとここから見えないように工夫をした狙いを持っております。

菊池：松本城下町のジオラマはどのくらいの範囲を予定していますか。

事務局：設計JVが作成した資料の6ページをご覧くださいんですが、城下町については北から南の端まですべてということで、資料の「床面表現について」と書かれたところで、ジグザグで描かれている範囲すべてを表象しようと思っています。それを250分の1というスケールで、先ほどの説明の中でも申しあげましたが、やってみると南北で約10m、東西で約6mのかなり大きなジオラマになると思います。

菊池：これは露出展示ですよ。

事務局：そうですね。例えば、何かカバーをかけるということは考えていません。

菊池：大掃除が大変そうですね。せっかく西山のイメージを長く表現しようとした案が出されて立体的に出てくることになったんですが、松本城下町とその西山までの展示をどう繋げるのかなと。もちろんその中心は松本城というのは分かるんですが、松本市の人たちは言わずもがな分かるわけですけれども、それ以外の人たちにとって位置関係をジオラマの中で見られると分かりやすいんじゃないかなと思ったんですが、どこまでジオラマで再現できるのかというのをお聞きしたいです。西山と松本の街がどういう風に繋がるのか。小さくするとジオラマにしたときに分からないですし、かと言って大きくすれば範囲が狭くなる。この中にも書いてありましたが高さをどのくらいにするかによって、私のような身長が高くない人にとっては見づらい高さというのがありますし。ジオラマというのは資料をどれだけ用意できるのかというのがありますから大変です。同時になかなか変えられないということがあって、展示替えを頻繁にという趣旨からいっては厳しいのかなと。それは覚悟していくということなんでしょうけど。

後藤：菊池先生が言われたように掃除は大変になりますね。

菊池：想像以上に棚にはホコリが溜まりますよね。

後藤：人の大きさは250分の1だと人は小さくなるので人は少しデフォルメする形にしなければだめでしょうけれども。

事務局：まだ確認をしていなくて情報しかないですが、犬山の方が資料の中にも若干書いてあるんですが、高さはデフォルメをしているという情報はもっているんで、それは人だけでやっているのか、あるいは建物もそんなに破綻しないぐらいのデフォルメをしているのかというのは具体的な事例として聞き取りを進めていかないといけないかなという風に思っています。

菊池：同じようなのを川越博物館が作っていますね。

事務局：菊池先生からも確か川越でカメラでやるという。

菊池：映像で動画を作って、何となくあれで動かされたような気がして。

関：新しい展示の構成の中で、「ともにある山」とありますが、当初の中では展示構成は「山・水・道」で展示コーナーを設ける。ただし、今回の開館にあたっては「道」をテーマにして「山」の方は、おいおい数年後の展示対象というお話だったんですけども、そこは方針転換をされて「山」を展示コーナーを創設するということですね。地理的にも城下町があって奥の方に設定では槍ヶ岳ですけども、松本市の地理的なものをそこに反映されて中間にあるものが暮らしだったり、非常にまとまっていいていいと思います。

先ほど菊池先生がおっしゃっていました歩荷のシルエットの後ろ姿が衝立になるというのは、あえて見通せないように衝立風に置くということなんでしょうか。

事務局：意図としてはそうですね。

関：その奥に高山（こうざん）の画面を再現している造作がある。

事務局：はい。

関：これは槍ヶ岳か奥穂高ということですけども。

事務局：そうですね。市の一番高所が3,192mの奥穂高か一般に「美ヶ原から槍ヶ岳まで」と表現をよくしますんで、そういう中でも尖がっているというイメージの槍ヶ岳を持ってくるというのも1つかなと。今回は槍ヶ岳の方で考えてみているということです。

関：衝立の歩荷ですが、どの街道筋の歩荷なのかをしっかりと想定しないとと思いますけれども、高山（こうざん）に行く衝立の歩荷さんは街道筋を行き来する荷を担ぐ歩荷なのか、案内人兼人夫さんなのか、その辺の街道筋なのか高山（こうざん）の奥山に行く荷担ぎなのかを区別した方がいいのかなと思います。

事務局：いま写真資料として残っている歩荷は、どちらかというと登山の人夫として荷担ぎで行った人のものしかありません。それに基づいたイラストの

ような再現になるんじゃないかとイメージは持っています。

原：尾州岡船で牛を入れればどうかと。向こうから出てくる感じだと牛の方が迫力があるのかなと。その方が奈川の話もできますし、いいんじゃないかなと思います。牛がいると人がいるよりも「何だろう」と思うし。

菊池：糸魚川の根知谷の歩荷は、雪が降る前は牛も連れているんです。さっきお話したように野麦峠を超える歩荷と白馬を超える歩荷とではもしかしたら持ち物が違うのかもしれない。

原：大きな牛の絵馬なんかを探してきたら驚きはあると思います。

菊池：イメージの展示なのかもしれないですけども、それは正確を期した方がいいと思います。根知の歩荷については糸魚川市がやりましたので報告書がまとまっています。

ほかにご意見ありましたら。

後藤：戻ってしまいますが、ジオラマのところですがこの部屋を全体に暗くするという千賀さんの話でしたけど、ジオラマのところはスポットが当たるような格好になるんですか。

事務局：はい、そうですね。ものを引き立たせる演出照明のようなものを「お城のあるまち」の中では象徴的に使っていきたいと思っていますので、このジオラマのところは当たります。

後藤：6ページにある「断面の見せ方について」のところですが、のぞいたときに見える明るさが採れるんですか。

事務局：そうしなければならないので、そこは抜けてしまっていたので設計JVとも確認しながら進めます。

後藤：それから、7ページのところにイメージ図があるんですけども、これはいまの段階では、模型の人は結構触られて大変じゃないのかと。

事務局：数がかなり多いので、これは今後精査をしていきますが、狙いとしてはやっぱり2.5次元ということで、その世界に入り込んだような感覚をこのブースでは持っていただいて、この人たちと記念撮影をしていただいたり楽しめるエリアになればいいかなという思いはあります。

菊池：趣旨はわかります。これだけのものが置いてあったら消防法は大丈夫でしょうか。

事務局：はい、確認します。

後藤：半立体のイメージというのは左側の図でいうと赤い線が引いてあるところにそういうものを作ろうとしているんですか。壁際に全部くっ付きますか。

事務局：赤いラインのところは概ね出てくるところというイメージです。

原：立ててもたぶん壊れてしまうと思うんです。子どもがぶつかってしまうと思うので壁際に沿えるような形で中を通れた方が、賑わいの横を通る方がいいかなと。間を通るのは格好いいんだけど、子どもが走り回ったら怪我するんじゃないかと思うんですよね。壁に集中してそれを表現して、もう

片側も作って両側をくぐり抜ける形でもいいとかと。

後 藤：どうしても人形は中に置きたいんですね。

事務局：そうですね。なかなかほかの館では見たことがないものなので、ウチらしさにはなるかなと思ったり、こっちから見ると人形なんですけど裏にいくと何かちょっと書いてあって当時の服装やら何かを考えさせるという展示の仕掛けにもなるのかなという思いはありましたけれども、危険性などもありますので精査して考えます。

後 藤：ちょっとした写真スポットにもなるかもしれないのでそれは面白いね。

菊 池：壁面に書きちゃうと裏側は見えませんか。

後 藤：幟（のぼり）なんか立てると高さがあるから結構迫力があるね。

事務局：いまこの絵だとだいぶ壁際に幟があって実際の絵よりもかなり短い幟になっています。これをもう少し手前に出してくれば、丁度天井が高いのでいい感じに復元できるのかなと。

後 藤：宝船はいまあるまま出す予定ですか。

事務局：はい、そうですね。

後 藤：修復をかけるとかはしないですか。今回の展示に間に合わなくても少しずつりペアした方がいい気がします。

事務局：いまだいぶ人形も衣服がほつれたりだとか、船自体も塗装が剥がれたりしていますので、その修復も予算化するにはしています。ただ、業者さんもできるところが限られるという予算的にもかなり大きくなりそうなので、どの程度までできるのかは調整します。

菊 池：展示用の資料ですから実際に使うわけではないので、ある程度復元というか保存処理でいけるんじゃないかな。

ほかにご意見はありますか。

原：ここまではたぶんいいと思うんですけど、問題は4つの空間ですよ。それをなるべく早く固めないで造り込みに負けちゃわないかと思うので、そのところを早めにやっていかないと、たぶんバランスがとれていかないなど。それも並行してお願いします。

菊 池：特にジオラマを対応すると最初は物珍しさでいいんですけど、1つは大掃除が大変だというがありますが、ジオラマの場合いつ行っても同じになってしまうんですよ。変えるのも大変ですから、その辺も配慮が必要になってくる。

展示の説明を聞いていて大変だと思うのは東西50m、南北18mというのは空間の制約がありますね。これはたぶん東西50m、南北18mでなければ、真ん中に松本城下町を持ってきて自由にいくやり方もできると思うんだけど、この空間構成ではそれはきついですね。

ほかにございましたら。それでは、意見・質問など出尽くしたようですので、「常設展示の空間構成と展示内容の検討状況について」は、いま

ご説明いただいた部分については提案どおりということで話をうかがったということにしたいと思います。

全委員：了。

菊 池：用意された議題は2つで終わりましたが、その他に何かございますでしょうか。

後 藤：直接関係していないんですけども、福井の市立博物館に行く機会がありまして中学生たちが学習に来ていて展示室内に椅子が用意してあってそこに腰かけて調べて書いているような工夫されたところもあったので、今回の場合「探求の井戸」のところにそういったスポットがあるのかもしれないけれども、展示の場所でもゆっくり見られるような座る場所も含めて考えておいた方がいいかもしれないと思いました。

菊 池：ほかに何かございますでしょうか。それでは、用意された議題、その他も終わりましたのでお願いいたします。

船 坂：以上をもちまして、「第6回松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会」を閉会したいと思います。ありがとうございました。